

と覚悟して居りましたが、然し或る半面には生きていると誤り、水と神像と云ふ神像も、腐つて居りました。

二十一年五月二十三日、梅木の飯塚勝徳様よりのお通知ですべてが解決されました。清は沖死で死んだ。と云ふ事だ。

取付要二十四日取れるものを取り取り梅木へ参り飯塚様を訪ねて或る意味での安心を致して帰りました。去る十月二十三日、英霊帰国十一月二十三日運送会に依る合同葬を終り、同日同様の既も墓地に埋葬致しました。

男五人兄弟を由いて四人共軍人でした。一人息子を、夫を、なくした方々の広い日本に多い事を思へば昔か自々の身代りに散華して兵隊と争つた事より格別に百歳念神を蘇へて居ります。

昭和二十一年十一月二日 夜半

有線 清少衛在官の通知

承らく御無沙汰致しました。その旨の御返書に御元電の事と拜察申上げます。小生一日の日前にて陸軍少尉に任ぜられました。

102

本書に上座以取益々元氣旺盛、何事御体も下さ。昔々に宜しく

奇談 清中尉 書簡

拜啓 御無沙汰致しました。秋令も候御仕度の手と存じます。 (中略)

突然ながら征露に就く日興近から直り一身御務にして奮闘してゐます。初陣が此らも唯々志の至誠に就して是頃守護の大運に幸ひす。生来二十余年の親軍職の務今に元り。時々の及の平定期致します。

出陣に際して上級者の誓々林の如く奮闘一存らんと奉祈念致します。

(北守岳邊 江田島 当地)

弟 桑岡三郎少尉を偲ぶ 兄 桑岡義明

父去りて早や十九年 父存き後の淋しきも  
母の愛に助けられ 父々高野へ懸學に  
後に残りし母の身も 苦勞に苦勞を重ねつ、  
心つと背をた二十年 支那手裏の物老に  
現役兵にて我は征く 雨火の空に活躍し

進んで解印生駐に 大原野戦前小水で  
スマトラ攻路効を得て思争に才置した小水も  
第二の弟留野中に 中支に出征告戦し  
やがてビルマに戦戦し 名譽の戦死を遂ぐ  
弟三弟三郎も 高六三年在幸中  
字受の百石で出征し 喜知久留米の業終へて  
やがて宇治に戦戦し 勇子勇んで沖絶へ  
警備訓練重ぬ中 本土攻路前ぶれに  
敵軍襲の跡本る 昭和二十年四月八日  
今日こそ大望の日なりとて 陸奥の海を乗切て  
敵陣或細き酒り抜け 敵陣はかけて爆雷投下  
あ、勇ましいい奇襲得攻取一才ニ才三才と  
出撃重方その中に 味方も多敷傷つきて  
今に小水までと断念し 残頁証に引上げて  
那海 直里防備に就きたれど  
敵軍更は日についで 難攻射撃も相成つて  
去程に盡させぬ奇襲の敵軍 固下の其の中に

最後の望みは唯一つ増援軍あるのみ 此の時と  
若は連終の命受けて矢と二手に分け盡め  
任務は重くこゝれまでと 斬込み隊に加はりて  
辨がたにて血に染る時五月十五日朝まだき  
あ、壮烈なるかな若し 其の武勇は偉大なり  
今日も立たない八月の十五日敗戦の此苦災か  
何の快りもなき敵に 己に覚悟はしておれど  
石の礮なる便り得て始めてしつたこの事案  
大原野戦この尾に二人の子を失ひし  
母の心を思ふときいつも目頭は水上がり  
急に老いた心して 何かについでに激しう  
又としてこの今人を盡さすうらみおるぞろが  
併して笑ふよ若し 母に對する孝養は  
三人分を引受けたる 冥福して哭れ若し

かす／＼の望を後に残しつゝ、

母をしのいで居るらん夫仰せ

おやん、ういのかあるらん夫仰せ

兄としてつくさず許せ今はだ

歌りにし希冀を思ふ

三郎の辞世

和譜一致 吉中 收入 既真 未標

三郎の反右無補実行案となりたり

河老原 辰吉 三郎

父 海老原 伸治

辰吉は大正十年八月二十日、辰吉が沖繩縣那覇市大東島大日本製糖株式会社大東島製糖所に勤務中に出世致した子に二十歳頃迄同島にて育ちました。小学校も昭和三年四月全島小学校に入学致し、卒業の中は沖繩語を二番度く覚へて土曜の夕との文脈に私語遊説して笑つた事も多々ありました。

昭和五年七月辰吉が三年生を卒業後一回帰里時不慮下痢病に因りて不幸な事となりました

の辰吉も全府国民学校に転校しました。転校後南大東島国民学校の受持を主よりの連絡に依りて龍白小僧辰吉が転校したので転校を機に少くもこの辰吉の生活が少しづつかゝり出した一つと存りました。

昭和九年秋立石橋で入学十二年を以て、この間上級生と口論喧嘩が絶えず時には受持の教師より辰吉に謝して転校を促した事迄ありました。とてどく曲つた事か嫌ひなのでそんな事にはなつたのどうと承つておきます。

其の白川崎某工場に勤務しました。少年戦車失を憶ひて志願しました。が入資並利のため目的を遂げず断念し東京門前組に転校し、株式に渡り全組工場に勤務。全所を終り、教員候補を受け、甲種合格となり、入学前の暫しの間を家に居り、(この世は)学校を出てから居る暇する程は家と居た事ありませんでした。

昭和十七年四月、中瀬密使部才三十大部隊に入隊致しました。

例の真下下級を預かりました。故か成績も良く教官より再三下士官志願を促す事もありました。始めは其の志願も出来ぬかと思つたが、しつと経るに従ひ、人として身と志願も望むべき下士官志願を遂げ、幸ひに優秀な成績にて合格致し、中瀬密使部の教育隊に於て十一月の特訓教育を受けました。同隊に於ても大いに頑張り、特訓も満足にこなした。一入隊して、教育終了後、東京部三十大部隊に一旦歸り、昭和十五年二月、東京部へ転属を命ぜられ、東京部教育を受け居る間七月に至り、マリアの欠陥は本土の守備を

軍備を備へたるに及び全面臨時動員を下の同歩兵隊も一節のちを考慮して即ち部隊に参加した。横隊が五吉も依承の沢部隊に救出。落竹も同も全く同年九月船始末へ既科及最に至り二十大。戦隊編成と次に三中隊の一兵に如はり江田島にて教育を受け出動の同並に控へて次の起き運送  
がありました。

「軍人として重責任務を命ぜらるるは必出征するから生運を期せず。陛下のたかひ命を挙げも覚悟」  
とのみ。以後當として消息なく終戦を迎へ不存の明後を迷つてゐました。一本気で責任感が  
強い子でしたので任務が任務で「あり不存の強感を感ぜ下らぬ出征地も「さきり」は分からず  
部隊名等も判明せず居る中隊等存。暗運者よりの運搬にて出征地が「として」又悲しくも戦死  
した地が島こそ運へ誕生の地沖繩隊であったこと判明致しました。奇しくも部隊が何れか存じ  
ませんが、斯くも上は絶望なし。らたすら来世での幸福を日々祈つて居る次第です。

(二十二年三月二日)

### 兄島津貞二書長を偲ぶ

島津

孝

滿州露城中現地百米になつた兄は北支を洛陽攻取に参加してゐた。その頃私は東京から二支  
隊に初五支隊隊長として渡切つて居た。洛陽攻取も一敗を喫いた日支の間の突撃を三  
二二

つたが率の半分の戦場一つせず極めて元氣だ。今度中岳の部隊に転属した。他の左衛門  
云々んども判るだらう」と。守番「……」船始末だ。あ、何時か聞いた船始末  
攻隊に属しない。去年新選隊で別れが最後になるだらう。この時私は直に兄宛宛を覚悟した  
のだ。

「それから何もなく守番のりの便りを取取る。

「毎日刺殺と眠なし。中隊にも前と同期の岸本少尉隊が居り居ると。次の便りは沖繩から  
だったのだ。十二月書いた便りと二月に手にする。『生れではじめて眠り正月を迎へる。前  
地も重責が繁しくなつた事だらう。他の任務も重大になつて来た林だ』と。

沖繩上陸はそれから何もなくだった。思へばこの便りが兄の宛宛唯一の遺言と守つてしま  
うものだ。兄の遺言と宛宛しつゝ、私も自己の任務に邁進した。

或る日………と此はあの次にぬれつゝ英戦の大詔を拝した八月十五日も運送の恩ひ  
ととなり隊では長男も私も復員して足る運賃を待ちかねて居た。今年の三月の中隊だった。  
町でいふ通り同期生の船始末だったAと合つた。  
Aは最新沖繩に居る水軍上陸前台湾と移動したこと。及びAに兄が沖繩に任つて居る  
事。中隊長が岸本であることを知した。Aは低い声で岸本は戦死したらしいと教へ知つて居  
る状況を知して涙した。

この時死の消息も殆ど確実となつた。唯、彼が死にのみまつたこの事を告げられたのは、  
中学校を卒業して直ぐ靖州に就職し入部第一ヶ月家に居てハイラルに在る除隊後一月、  
程原に居て通判の会社に就職した。そこで退却百集となり尤夫——宇田——沖繩と中学  
故卒業後十年月原に居た事二月間、二十七年間の生涯の三十分一以上を外地で過した  
兄弟つた。明暗で、社交的でスポーツマンの兄弟つた。  
五月三十日とうとう兄弟死の悲劇は一応の幕幕に降りもたらされた。  
併し皇國の敗戦も知らず敵つた兄弟は手解ごつたらう、せめて息を吐きつ、敵つただらうから。

### 沖繩よりの書簡

田 辺 見 平

祖父上林 御母上林始め皆を羨りありませんか。御無沙汰許りしてゐます。御無沙汰が  
益々元氣でありますから何年御守公下さ。空費で浪費はありませんでしたでせうか。  
浮々義江や御母も入交な事と思ひます。こゝ私がお便りすればいい事勝手なお願いで申談  
ありませんか出来ましたら、二百圓程と青の黒の眼鏡二番、軍装品の白ハンツ袖上靴、  
フィルム(プロニー)三本、靴の庄記が何か半と、二冊を送り贈り度御願申上ます。  
多量に寒い日もあります。大分暖かい日には暑いな事、へあり黒砂糖などよくつくらぬます。  
紅茶があったらそれをもつてこい。今時内地本邦の砂糖はと聞々思ひます。  
先づは右御願ひまで申上ます。

### 無瀬田敬結

書 簡

二天

先見書 兄の居る旅館に敬結旅行の書にこそそめて起さ巨つ度ぬること、二週日に書  
人です。

入つての同様の不可思議な事、つ、南に在りんとす。

御一回林の御経略の程、折リエります。

敬 具

### 速 書

久 可 博 敏

別に太ひ我すことも御座居せんか二十有餘年間の永い日月深い御慈しみに世えて何一  
本行さずし得なかつた事は何年お許し下さい。父上林軍人として陛下の御威として任途に  
けり月故は手解者です。喜んで御成に立ち元を海より離く辨げ、御母公申上げを覚悟です。  
色々事月初旬にのり、白つて任途に就く。若し戦死の場合此の便りが此の世の最後の  
引成の予感となる下せう。中隊は全滅したる決心に達して居ります。  
御一組人の生死などにこだはつてゐる場合ではありません。不肖者の片屑には一組御  
の人をなす御願ひ昇つて居ります。あの世の道にのみか、こゝに居る責任感で一つ  
であります。日頃の父上の御教訓を肝に銘じ御成致します。敬令戦死しても決して大死は致



昭和二十年二月七日

遺言

蘇定 尾

長、幸和世跡に相成り、何も是はせる様も出来ず申訳ありませんでした。先んて御めがましす。

皇軍の一員として立派に死んで行きます。其の手だけは生前に於て約束致します。

今日も皇軍は昨年六月九日復讐合戦の日から期してまいりました。日本男子の本懐です。

死んで行きます。何卒御守り下さい。

皇軍の御守りには所長先生に話せばおかりますから誰でも行きたいと吉山君に行して下さる。吉山君の遺言は遺言の余り、皇軍にはおかりません。將軍ははります。

あつた間に申し残す事はありません。

御一可成の御守りをお祈り致します。

心算の時はお目録に遺言を御世跡に相成りました。よくよく申して下さい。御守りから死なされた。おありましたら、皆んを尋ねて下さい。立派に役に立つたのですから。

皇軍にて生前に於て死んで行きます。遺言を遺言しました。

御一可成の御守りをお祈り致します。

散る標 x  
 残る標 x  
 散る標 x

稲垣 戸長書簡

二〇・二・七日附

承らぬ御返り文致し誠に申訳ありません。

父に於ては皆本を御守りとして御守り申す事と存じます。人生最後迄に御守り申す事と存じます。正月もすんだ今日、日ごとく御守り申す事に充分です。母君の正月と願ひ合せて何かもう御守りのとれぬのを御守りの一つです。母君の御守り申す事と存じます。遺言の今日此頃おそびに、つて来る皇軍の御守り申す事と存じます。先介御守り申す事と存じます。御守り申す事と存じます。

西山 治郎書長 戸長書簡

第一、人々を御守り申す事と存じます。人生最後迄に御守り申す事と存じます。母君の正月と願ひ合せて何かもう御守りのとれぬのを御守りの一つです。母君の御守り申す事と存じます。遺言の今日此頃おそびに、つて来る皇軍の御守り申す事と存じます。先介御守り申す事と存じます。御守り申す事と存じます。

足音は十時過ぎた、く下へそかて行く、又々二人各三人の半歩、身が水と折るの予、  
足音の、足口の叔母ごんにまろしく、  
徳乃光江共元氣の、他は元氣だ、乞味心  
砂塵の食べこせ度か仕方か存い。体と行に氣を付けて道を歩け、木が生きて文句迷べて舞舞  
する。

南海の何処に此の身は果てるとも  
後歳夏の香を想はけ  
軍神にフ、く、堪し、秋の風

### 辰山豊茂曹長最後の書簡

父母上様 運茂は此水より神代書に宛て進みます。善んで下さい。こんな嬉しい事ありま  
せん。命の存るかぎり戦います。生前の御恩は決して忘れません。何年か後と大切に  
(中略)  
運茂は何にも思ひ残すことはありません。  
く、父母上様に何の御恩もかへ、こす御恩の報ひかり御事けした事が残念です。でも今の運茂の  
心持は晴々として平公の念でもえて居ります。弟も後も一人前の軍人にして下さい。胆分贈  
三

下付下しなさいと存を大切にと吉つて下さい。父母上様をむりまじなさいと存を大切に並所の置  
候にまろしく。  
運茂より

### 父上様

### 若原定一曹長の最後の書簡

前略、運茂は、強暗く候と成りて参りました。其の行は意外なる矢立致せども益々運茂  
にて勤ま下される事と存じます。他も相変ず元氣にて太平洋渡海を果るなら来て見ろ運茂  
なまなり。  
朝池に大空も澄二一羽に鷹は向山手と存じます。砂塵に織の遊いませらう。他運茂は常  
不自由なした。共に元氣にて晴々遊ば

(当印ニ〇・ニ・一〇)

草々



英靈に告ぐ

森川清美

吾等可成の端迄を照り其の青白き灯を吹りと蓋ませぬ出の敷を恐るゝ文字として今  
はここに父の遺囑を讀みおせん。  
永天の及ぶ心あらば無き夜日と天に承り承けよ。夜路の光るあの原野で兄弟と共に斗ひ兄  
弟と共にあらば困苦に懸懸と苦舌に溢させぬ道を辿り爪を人々の見えぬ多くの運命に人々  
の魂を無き深い野に墜りて居る。花次第日本男子の心懸死なく、会山は嶺國といふ等と  
共に誓つた台言葉でつかつたか、  
魂を我等勇傷せる身を養合の死遊に置く。今や日本は三十年の丁度と日本民族唯一の誇りと  
誇つて共に降服せり。神物は不滅と誰か叫びしぞ。東洋の山嶽はくつきりと天地に其の骨を  
印して居ることあらう。誇り辱め幾多の挫折を胸に詰めかくて戦斗は止んだ。永古遠東は  
世の雷のこゝろ。死天の及ぶ。兄弟は祖國の勝利を信じ其の日本は不敗不滅の日本であつた。彼  
死天の及ぶ、併して中世の法則は神文化のみぞ之を創する事は出来得なかつた。威怒とし  
て享受は屈辱の二字に盡きたのだ。今や祖國日本は降服せり。吾等生を享けて二十有余年  
放へられたるは何の、魂は余りにして魂をあり置きた。  
胸に短刀を当てらる思ひ、其の言葉をかみ及す事か出来ようか。兄弟が東洋は荒れ果てた沖

死の山嶽に祈りとして幾十年の夢を覚めて居るであらう。

生かすか死か生ける風として吾等が魂の正體を尋ねて居るべきや。降服するに應ずれば其の山嶽に祈りして

砂丘

「讀しみて此の作文を海上戦斗未降服の日の昔長の靈に告ぐ」

海上戦敗辱にや彼が遺れる

魂をちやいけなさい吾等する

吾等するのさ運命の原よ

及しやけなさい吾等する

ケラマ志願に夕陽が落ちる

今も依然も無事なした

示にまみれた仮装服脱げば  
可愛い奴のそのマスエツト

陸上隊に捕へての翌日の某隊作業に、赤足の冲縄傭兵が獲りエに石をまだ土まきして工本  
まで費せて矢士達に送つて、軍の作業に勤勞教化しとる者達を彼方の丘、北方の海岸を  
ら際こへてくる。我々の傍連の場かサンプラスと走山坂の古と共に置く為の海岸まで進へ  
てくる。

「サンプラス」エンジンの調子はこうだ」

「調子なんだ、サンプラスを分断しなくてはお話らしいよ、重くなつても今中ビヤツ  
てしまふよ、昨日たかま敷隊の沖繩兵隊兵に逢ひなるとのことだと大変だからさ、

「ハッ」 貴族らしい心遣をするさ、敵ごんなか、沖繩まで見送られて、もう水  
止めで、サンプラス（中隊長）が各隊取りを始めたぜ、他の二一四号隊は沖繩でも異動なしが  
「おんなごんな太へ」 彼は此の氣の悪いサンプラスを手入してある時が一番楽しいんだからさ  
「へへへ」 貴族さ」

彼の野郎、面白いことよな、貴族や楽しいの時トヨ公の氣に逆かに行つてトヨ公と二人で  
「二五

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう

「サンプラス」も送つてくる時ならう  
「サンプラス」も送つてくる時ならう



敵の教しオ一隊の諸軍師陣地の立役にて、「イヨ」新山出取の命令が出た。先づ今  
 土佐の軍から小手渡へた。尋へりば、ウイスキーにナヨコロトそれら味い理華の上座  
 だ。可憐な兵隊は、一か途軍陣地を司令官だ。衆し手に待つて、くれし。と太つて突パンで  
 入りながら、何事なく近距離で軍兵隊の攻撃すか何陣地を出て行つた。或る敵の陣、此の  
 自分の手を陣地の河原の入口の岩中を突つて手を握り合つて別れを教及も今は此の各隊の一  
 行を撃つてしまつた。……  
 そうだ。○○軍師の所から尋ら手前コト三日。そして四日目の朝にはとう／＼自分達の  
 陣地にも敵の軍師が攻め入りて来た。  
 早朝から軍師の陣地の近所を突け入無敵から敵十騎の陣一隊が取り回し攻撃軍師と特銃の現  
 敵隊陣地。軍師隊は攻撃を歩歩進ませ、「と別れを陣地の河原の中は見え易き岩として行  
 く。第一別れを陣地へ行く。敵隊を各人が全身に感じながらの陣地だ。  
 「敵隊、オ二隊へ全明しを運ばされた。戦車隊の直隊と二隊突寄せた。此の各隊の百  
 歩隊の陣地は、昨日の○○軍師の陣地を突つておきてん。次で……  
 「どうした  
 「ハン××軍師の陣地を突きました。  
 「衛生兵

「どうした×軍曹」  
 「残念の味長敵ソ、オ一隊から敵方陣地した。戦車隊の中隊に行つたのだした。三  
 目を獲とうとした時やせました。  
 「戦車隊か」  
 「ハンやせんせん」  
 「下隊だす」  
 昨日の「オイス式大々、頃の番さだ無敵か。治療して貰つた。食事は、残りの味長で  
 つかけて来てやううか。どうだ。今夜あたり一ツ斬込にでも出て敵の陣地でも取つて  
 来て味い理華でも取るか……  
 こんな事を本々ながら、傷付いた自分を看護してくんだ。江田新隊が本から敵の陣地まで、一  
 として腹を痛めたことのがつた戦後、とう／＼秋の夜半軍師陣地……  
 そうだ。大馬二十日過ぎの夜の徳修ごつた自分達。陣地の河原の入口に敵に攻撃されと足  
 らぬてしまひ。一團陣地をヤフトみこい定を隔けて夜明後の陣地を全買して敵ら覚悟と定  
 めて各人出取の準備をして日の暮るまで待った。重傷者の隊長始めの○軍曹と○軍曹は、敵  
 生夫と敵として行くこと決定した。常に一隊でも良い大馬の下で一隊りしたら、敵  
 ども良いと太つては味長も、最後は別れを断、オイやせんか花の準備と安全準備を致してす

公卿のあも敬にして置いてくれなにか、と云つて覚悟を定めて居る水た鏡の鏡の鏡……  
 ○○軍營も頼む、頼むから手振舞を一つ置いていつてくれ、と手と合付し、決を述して此  
 の自分に太つた○○軍營の鏡に光つてゐた決……  
 と云つていふ、洞窟から出る時入口のところを眺めた手振舞の放散する音に、尾は手○○軍  
 營と叫びながら手を合はして陣地をまた自分どつた。

遊蕩の夢は何処迄も続く歌かきり無き戦友の死にまじりたる懐かき思ひ等、甚くたぬ言ひ表らば  
 せぬ程罪をなす血と涙の戦場の悲劇……  
 隊員殿として仲直しだつた戦友。

沖繩 沖繩  
 沖繩の山河よ  
 とこしへに戦友の霊を守れ。

墓標なき戦友の屍の枯れ果て、  
 尾花悲しき島屍の里

海上 在進系ニ大戦 疎鈍 成友 (戦死関係)

20	馬	名	住所	氏名
27	山	足立	青森	足立 藤
28	山	青森	青森	青森 藤
29	山	青森	青森	青森 藤
30	山	青森	青森	青森 藤
31	山	青森	青森	青森 藤
32	山	青森	青森	青森 藤
33	山	青森	青森	青森 藤
34	山	青森	青森	青森 藤
35	山	青森	青森	青森 藤
36	山	青森	青森	青森 藤
37	山	青森	青森	青森 藤
38	山	青森	青森	青森 藤
39	山	青森	青森	青森 藤
40	山	青森	青森	青森 藤
41	山	青森	青森	青森 藤
42	山	青森	青森	青森 藤
43	山	青森	青森	青森 藤
44	山	青森	青森	青森 藤
45	山	青森	青森	青森 藤
46	山	青森	青森	青森 藤
47	山	青森	青森	青森 藤
48	山	青森	青森	青森 藤
49	山	青森	青森	青森 藤
50	山	青森	青森	青森 藤